

JFEスチール株式会社
社長 (CEO)

馬田 一
Hajime Bada



技術立社フジコーへの更なる期待

私どもJFEスチールは創立から僅か2年余りを経過したところですが、フジコーさんには前身の旧2社（旧日本鋼管、旧川崎製鉄）の時代より、長きにわたりお付き合いいただいております。

弊社東日本製鉄所千葉地区（旧川鉄千葉製鉄所）にフジコーさんの千葉事業所が設立されたのは昭和34年。3年後には同じく東日本製鉄所京浜地区（旧日本鋼管川崎製鉄所）構内に事業所が設けられ、千葉と同様、鋼塊鑄型の修理にご尽力いただくこととなりました。

昭和40年代からは、新設された一貫製鉄所である西日本製鉄所（旧川鉄水島製鉄所、旧日本鋼管福山製鉄所）の鑄型修理に加え、グループ会社JFE条鋼（旧吾嬬製鋼所）の保全業務、ピレット鋼片の傷取り作業をお願いするため、仙台にも事業所が設けられました。

その後30年以上が経過し、連鑄化の進展とともに鑄型修理は減少していきましたが、現在も弊社の各製鉄所内事業所ならびに仙台事業所を通じて、多方面にわたりお力をお借りしています。あらためてフジコーさんとの繋がり深さ、お付き合いの長さを実感する次第です。

私が入社した昭和48年は、日本が1億2千万トンという史上最高の粗鋼生産量を記録し、初任配属された旧川鉄千葉製鉄所においても、歴代第一位の粗鋼620万トンを生産した年でした。私は第1製鋼部で連鑄に携わることとなりましたが、造塊法が本流であった当時の連鑄比率（千葉）は7.2%というレベル。“いかに効率よく鑄型を段取りするか”が、製造現場の最優先の仕事でありました。

旺盛な生産活動を支えるため、鑄型の熱サイクルは非常に激しく、その使用条件は過酷でした。数に制限がある中で、亀裂や割れを早く修理し、いかに鑄型を良い状態にしておくか。研磨の自動化、特殊溶接補修に代表されるフジコーさんの独自技術がまさにこれらの問題を解決してくれました。

また当時は、品質向上という面でも鑄型の整備は重要な要素でした。鑄型の内面に酸化スケールが付着している場合は、それが介在物となり品質を劣化させる結果を招くため、鑄型内面をグラインダー手入れすることが不可欠でした。この点についても弊社グループはフジコーさんの恩恵に浴してきたのです。昭和50年代に入ると、連鑄比率は急速に上昇し、鑄型修理作業は僅かとなっていきましたが、時代の変化を先読みされていたフジコーさんは保全業務や製鋼作業分野に積極的に進出されました。

加えて特筆すべきは、鑄型時代に培った技術力を基に、CPC、溶接、溶射、鑄かけ技術などを駆使した機械部品の製造、機械加工・熱処理など多岐にわたる分野を開拓し、以前と変わらず現在も私たち鉄鋼業をサポートしてくださっていることです。

世界的な複合材製造プロセスであるCPCは、鉄鋼メーカーに大きく寄与しているだけでなく、フジコーさんの技術立脚型事業をあらたに発展させた成果です。生産拠点である山陽工場では、30年以上もこの技術を基盤とした開発が続けられ、同工場の溶射設備に展開されている『フレーム温度制御可能な超緻密超密着溶射技術の開発』が今年8月、第1回ものづくり日本大賞に選ばれたと伺いました。このことはまさに、技術立社であるフジコーさんを象徴していると思います。

我が国鉄鋼業はここ数年、業況の改善傾向が顕著であり、再び活況を呈しています。苦しかった1990年代、日本鉄鋼各社は本社・グループ会社全体に及ぶ合理化策を講じる一方で、「技術力」を高める努力を惜しむことはありませんでした。私はこの技術力こそが、日本の優位性であると考えています。

技術力を背景に高い国際競争力を有しているのは、鉄鋼メーカーのみならず、我が国製造業全体に言えることです。特に自動車、造船、建設機械等の分野において、日本各社は他国の追随を許さない技術力を誇り、世界マーケットにおける存在感を高めています。これらのお客様の高い要求に応えることがまた、鉄鋼業の実力を上げ需要を伸ばすことに繋がり、良好な循環を生んでいると考えます。私たちは引き続きお客様との共存共栄を目指し、さらに技術開発に注力していかなくてはなりません。また同時に、鉄鋼業の製造をご支援くださる関連企業の皆様にも技術力を高めていただくことが望まれます。

その意味において、技術を重視されるフジコーさんの存在は誠に心強いものです。フジコーさんは現状の基盤技術の強化と環境関連への進出、さらに将来を見据えた研究開発を行なう目的で、平成14年に開発センターを立ち上げられ、ハードフェーシ

ングの技術開発等に注力されています。山本厚生社長のお話によれば、ハードフェーシングを中心とした最先端事業の売り上げを、現在の20億円から50億円に拡大したいとのこと。ハードフェーシング技術については弊社におきましても、各種ロール、ローラー、ライナなどの製品で既に提供いただいています。

私は製鉄所時代、フジコーの皆さんと接する中で、“フジコーの方々には自分の技術に自信と責任を持ち、最後まで手を抜かず実直に仕事を仕上げるといった共通の気質がある”と感じました。今後も『技術立脚』の社風を貫いていかれ、ハードフェーシング事業に関しても必ずや山本社長の示される目標を達成されることと信じています。

先ほども述べたように、フジコーさんが技術開発力を向上されることは即ち、日本鉄鋼業の競争力強化に繋がることであります。40年以上にわたり、独自技術をもって弊社グループに貢献してくださっているフジコーさんに、深い感謝と更なる期待を寄せつつ、『tsukuru No.13』巻頭言の筆を擱きます。

【経 歴 書】

ば だ はじめ
馬 田 一

昭和23年10月7日生 出生地 兵庫県

【最終学歴】

昭和48年3月 東京大学大学院工学系研究科 修士課程冶金学専攻修了

【略歴】

昭和48年4月 川崎製鉄株式会社入社
 昭和60年7月 千葉製鉄所製鋼部第1製鋼課長
 昭和63年1月 水島製鉄所製鋼部第2製鋼課長
 平成4年7月 水島製鉄所製鋼部製鋼技術室長
 平成7年7月 鉄鋼企画部企画室長
 平成9年7月 鉄鋼企画部長
 平成10年7月 経営企画部次長兼同企画室長
 平成12年6月 取締役 経営企画部長
 平成15年4月 JFEスチール株式会社 専務執行役員 経営企画部長
 平成17年4月 代表取締役社長（CEO）就任